

## 歌川廣重傳〔二〕

天保の初年、廣重、或人（諸侯か或は旗下）に隨行して、京師に赴き、行々山水を見て、深く感ずる所あり、これより専ら山水を畫くの志を起せりとぞ。（三世廣重の話）

按ずるに、綾垣羅文（綾垣氏は、姓名詳かならず、根津に住せし酒店の主人にして、三世廣重の友人なり、好事家なりしが、二三年前没したり、惜むべし、）といへる人のしるせし廣重翁が小傳に、會々幕府八朔御馬進獻の事あり、翁供奉して京師に上り云々とあり、八朔御馬進獻とある甚だ疑ふべし、殿居囊を閑するに、八月朔日五時白帷子、長、八朔御祝儀三千石以上、太刀、目錄、御馬代、獻上三之、大中納言、參議、中將、少將、侍從、四品、五位之諸大夫、布衣以上無位官無之而々嫡子共、御禮申上云々、都而年頭之御禮式に准ず云々、右は天正十八寅年、當日關東御打人之御恒例にて、如レ斯御祝儀始と申傳ふとあり、羅文子が八朔御馬進獻といへるは、蓋し御馬代進獻のごとなるべし、されば廣重は、畿内の諸侯或は旗下の人の八朔御禮として、江戸に出てたるに隨從して、京師に赴きたるものなるべし、よりに考ふれば、廣重は、此の頃既に火消屋敷を出でて、大鋸町に住し、専ら浮世繪を業とせしならん、しかして定火消同心の株は、文化の末か文政の初、譲りたるものか、猶考ふべし。

又按ずるに、此の時廣重は、驛々の景色を寫し、又日記にも

しるしたり、其稿本は、傳へて其の家でありしが、三世廣重これを出だし、表裝して二卷となし、某に譲りたりとぞ、其の所在今詳かならず、或人曰く、廣重が東海道を往來せしは、唯一回にあらず、屢々往來せしなり、然らざれば屢々圖をかへ出板すること、能はざるべしと、蓋し然らん、一説に廣重嘗て山水を畫ぎ、自ら其の眞を寫す能はざるを嘆し、四方に遊び、遍く山水の勝景を探らんとせしが、旅費の給すべきなし、如何ともする能はず、其の妻これを察し、竊におのが櫛笄衣服を賣却し、若干の金を得て、これを旅費に供せんを請ふ、廣重大に喜び直に懷に入れ、家を出て、放遊すること殆ど三年、胸中既に名山勝水を貯へ、江戸に歸りて、山水を畫く、一に意の如くならざるなし、これより畫風一家をなすと。

又按ずるに、一説に、廣重の京師に到るや、其の名詳かならされども、四條家の人に就き、四條の畫法を學びたりと、山水畫中往々四條に似たる所あれば、或は然らん、又一説に、廣重は、大岡雲峰に就き、南宋畫を學びたりと、これまた畫風の少しく似たる所あるを以ていへるか、雲峰は、江戸の人、名は、成寛、字は、公栗、通稱次郎兵衛、山水花卉に長せり。

天保二年、東里山人作、出傍題無茶論六冊を畫く。（岩戸板）

同三年、柳亭種彦作、ふしみときは熊坂物語後編二冊を畫く、前編は、國貞なり（西村板）、此の頃、風俗美人畫および鳥羽繪を畫く多し。

同五年、柳亭門人、瓢亭吉見種繁作、旗瓢菟水の葛葉六冊を畫く。(鶴喜板)

按ずるに、吉見種繁は、姓名詳かならず、作者部類に、種繁は、種彦の弟子歟、天保四年の春新板に、改色團七島(西村屋板)といふ臭草紙の作、見えたり云々。

又按ずるに、草雙紙の畫は、廣重の長ずる所にあらず、されど地本問屋の依頼なれば、止むことを得ずして、畫きたるものならん、されば廣重が畫きし草双紙は、僅に五六部に過ぎざるなり、天保五年以來嘗て畫きしとなきがごとし。

## 御嶽寫生旅行

白 鷗 生

十月の月次會で御嶽寫生旅行が發表せられ、控室の一隅に規則が貼られて賛成者を募集した。所が如何云ふわけか一向に記名するものがない、多分は一週間といふ豫定に度肝を抜かれてちた／＼とたぢろいだ弱武者の多かつたと見える、さて僅かに數名を得ただけで、逆も研究所としては實行出來ぬといふ始末、かるが故にその筋の補助を得て、有志といふ名の元に御嶽寫生旅行會は成立した。

十月三十一日の朝三時、目覺し時計に呼起されて道具を肩にして戸外に出た傾く月影を踏んで飯田町停車場に急いだ、停車場にはYA君は柱に凭れて人待頭で戸外を見て居る、やあとの聲

を掛けて室内に這入ると、薄暗い室の中に同志の面々の顔がぼんやりした輪廊で等しく此方を見た、SE、SM、TA、YY、Tの諸君、SK君が遅れて来る、一同ぞろ／＼と汽車に乗り込んだ、餘り早起きをしたので眠くてたまらぬ、腰掛にごろ／＼横になつた、次のステーションへ着くとどや／＼と二三人に乗り込まれて大狼狽、眠い目を擦り乍ら窓に凭り懸つて夢うつゝの間に幾驛かを過ぎた、中野あたりへ來た時分しらしらと夜が明けた、窓外を見ると美しく雲が中空に懸つて居る、空は一體に雨もよひのしつとりと落着いた色で、遠近の紅葉の色も沈んで居て好い感じを與へる。

やがて汽車は立川に着き、吾等は此處で降りて、日向和田往きに乗替へるのだ、驛員に割引の談判をした所が一向に要領を得ず、青梅へ往つて拂つてくれといふ、誠にのんきな次第だ、さて吾等はこののんきな汽車に乗つた、室は恰と吾等の獨占で、TA君の前へオイ一點張りの號令やら、SE君の詩吟やら、SⅢ君の俗謡やら中々に賑やかなもた、汽車はのろ／＼と走つて紅葉の村をいくつか過ぎる、紫の山は近づいてくる、中神、拜島、福羽、羽村、小作などといふ變手古な名のステーション毎に十分二十分と停車して往く、青梅へ着いた時YA君は降りて汽車賃を拂ひに往つた所、又候日向和田でしてくれとの事だ、此處で青梅せんべいのコンパニーをやつた、かくて日向和田へ着いたのは八時頃であつた、假小舎然たるステーションの驛長兼驛夫殿に汽車賃を渡して構内を出た、兼て